京都日記

芥川龍之介

光悦寺

光悦寺(くわうえつじ)へ行つたら、本堂の横手の松の中に小さな家が二軒立つてゐる。それがいづれも妙に納(をさま)つてゐる所を見ると、物置きなんぞの類ではないらしい。らしい所(どころ)か、その一軒には大倉喜八郎(おほくらきはちらう)氏の書いた額(がく)さへも懸(かか)つてゐる。そこで案内をしてくれた小林雨郊(こばやしうかう)君をつかまへて、「これは何(なん)です」と尋ねたら、「光悦会(くわうえつくわい)で建てた茶席です」と云ふ答へがあつた。

自分は急に、光悦会がくだらなくなつた。

「あの連中は光悦に御出入(おでいり)を申しつけた気でゐるやう

ぢやありませんか。」
　小林君は自分の毒口を聞いて、にやにや笑ひ出した。
「これが出来たので鷹ケ峯と鷲ケ峯とが続いてゐる所が見えなくなりました。茶席など造るより、あの辺の雑木でも払へばよろしいにな。」
　小林君が洋傘で指さした方を見ると、成程もぢやもぢや生え繁つた初夏の雑木の梢が鷹ケ峯の左の裾を、鬱陶しく隠してゐる。あれがなくなつたら、山ばかりでなく、向うに光つてゐる大竹藪もよく見えるやうになるだらう。第一その方が茶席を造るよりは、手数がかからないのに違ひない。

それから二人（ふたり）で庫裡（くり）へ行つて、住職の坊さんに宝物（はうもつ）を見せて貰つた。その中に一つ、銀の桔梗（ききやう）と金（きん）の薄（すすき）とが入り乱れた上に美しい手蹟（しゆせき）で歌を書いた、八寸四方位（くらゐ）の小さな軸（ぢく）がある。これは薄（すすき）の葉の垂れた工合（ぐあひ）が、殊に出来が面白い。小林君は専門家だけに、それを床柱（とこばしら）にぶら下げて貰つて、「よろしいな。銀もよう焼けてゐる」とか何（なん）とか云つてゐる。自分は敷島（しきしま）を啣（くは）へて、まだ仏頂面（ぶつちやうづら）をしてゐたが、やはりこの絵を見てゐると、落着きのある、朗（ほがらか）な好（い）い心もちになつて来た。

が、暫（しばら）くすると住職の坊さんが、小林君の方を向い

て、こんな事を云つた。

「もう少しすると、又一つ茶席が建ちます。」

小林君もこれには聊か驚いたらしい。

「又光悦会ですか。」

「いいえ、今度は個人でございます。」

自分は忌々しいのを通り越して、へんな心もちになつた。一体光悦をどう思つてゐるのだか、光悦寺をどう思つてゐるのだか、もう一つ序に鷹ケ峯をどう思つてゐるのだか、かうなると、到底自分には分らない。そんなに茶席が建てたければ、茶屋四郎次郎の邸跡や何かの麦畑でも、もつと買占めて、むやみに囲

ひを並べたらよからう。さうしてその茶席の軒（のき）へ額（がく）でも提灯（ちやうちん）でもべた一面に懸けるが好（よ）い。さうすれば自分も始めから、わざわざ光悦寺などへやつて来はしない。さうとも。誰が来るものか。

後（あと）で外へ出たら、小林君が「好（い）い時に来ました。この上茶席が建つたらどうもなりません。」と云つた。さう思つて見れば確（たしか）に好い時に来たのである。が、一つの茶席もない、更に好い時に来なかつたのは、返す返すも遺憾（ゐかん）に違ひない。――自分は依然として仏頂面（ぶつちやうづら）をしながら、小林君と一しよに竹藪の後（うしろ）に立つてゐる寂しい光悦寺の門を出た。

竹

或雨あがりの晩に車に乗つて、京都の町を通つたら、暫くして車夫が、どこへつけますとか、どこへつけやはりますとか、何とか云つた。どこへつけるつて、宿へつけるのにきまつてゐるから、宿だよ、宿だよと桐油の後から、二度ばかり声をかけた。車夫はその御宿がわかりませんと云つて、往来のまん中に立ち止まつた儘、動かない。さう云はれて見ると、自分も急に当惑した。宿の名前は知つてゐるが、宿の町所は

覚えてゐない。しかもその名前なるものが、甚(はなはだ)平凡を極(きは)めてゐるのだから、それだけでは、いくら賢明な車夫にしても到底(たうてい)満足に帰られなからう。

困つたなと思つてゐると、車夫が桐油(とうゆ)を外(はづ)してこの辺ぢやおへんかと云ふ。提灯(ちやうちん)の明りで見ると、車の前には竹藪があつた。それが暗の中に万竿(ばんかん)の青(せい)をつらねて、重なり合つた葉が寒さうに濡(ぬ)れて光つてゐる。自分は大へんな所へ来たと思つたから、こんな田舎(ゐなか)ぢやないよ、横町(よこちやう)を二つばかり曲ると、四条(しでう)の大橋(おほはし)へ出る所なんだと説明した。すると車夫が呆(あき)れた顔をして、ここも四条の近所どすがなと云つた。そこでへええ、

さうかね、ぢやもう少し賑（にぎや）かな方（はう）へ行つて見てくれ、さうしたら分るだらうと、まあ一時を糊塗（こと）して置いた。所がその儘、車が動き出して、とつつきの横丁を左へ曲つたと思ふと、突然歌舞練場（かぶれんぢやう）の前へ出てしまつたから奇体（きたい）である。それも丁度都踊（ちやうどみやこをど）りの時分だつたから、両側には祇園団子（ぎをんだんご）の赤い提灯が、行儀（ぎやうぎ）よく火を入れて並んでゐる。自分は始めてさつきの竹藪が、建仁寺（けんにんじ）だつたのに気がついた。が、あの暗を払つてゐる竹藪と、この陽気な色町（いろまち）とが、向ひ合つてゐると云ふ事は、どう考へても、嘘のやうな気がした。その後（のち）、宿へは無事に辿（たど）りついたが、当時の狐につままれたやうな心も

ちは、今日でもはつきり覚えてゐる。……

それ以来自分が気をつけて見ると、京都界隈にはどこへ行つても竹藪がある。どんな賑な町中でも、こればかりは決して油断が出来ない。一つ家並を外れたと思ふと、すぐ竹藪が出現する。と思ふと、忽ち又町になる。殊に今云つた建仁寺の竹藪の如きは、その後も祇園を通りぬける度に、必ず棒喝の如く自分の眼前へとび出して来たものである。……

が、慣れて見ると、不思議に京都の竹は、少しも剛健な気がしない。如何にも町慣れた、やさしい竹だと云ふ気がする。根が吸ひ上げる水も、白粉の匂ひがし

てゐさうだと云ふ気がする。もう一つ形容すると、始めから琳派(りんは)の画工の筆に上(のぼ)る為に、生えて来た竹だと云ふ気がする。これなら町中(まちなか)へ生えてゐても、勿論少しも差支(さしつか)へはない。何(なん)なら祇園(ぎをん)のまん中にでも、光悦(くわうえつ)の蒔絵(まきゑ)にあるやうな太いやつが二三本、玉立(ぎよくりつ)してゐてくれたら、猶更(なほさら)以て結構だと思ふ。

　　裸根(はだかね)も春雨竹(はるさめだけ)の青さかな

大阪へ行つて、龍村(たつむら)さんに何か書けと云はれた時、自分は京都の竹を思ひ出して、こんな句を書いた。それ程竹の多い京都の竹は、京都らしく出来上つてゐるのである。

舞妓（まひこ）

上木屋町（かみきやまち）のお茶屋で、酒を飲んでゐたら、そこにゐた芸者が一人、むやみにはしやぎ廻つた。それが自分には、どうも躁狂（さうきやう）の下地（したぢ）らしい気がした。少し気味が悪くなつたから、その方（はう）の相手を小林（こばやし）君に一任して、隣にゐた舞妓（まひこ）の方を向くと、これはおとなしく、椿餅（つばきもち）を食べてゐる。生際（はえぎは）の白粉（おしろい）が薄くなつて、健康らしい皮膚が、黒く顔を出してゐる丈（だけ）でも、こつちの方が遙（はるか）に頼もしい気がする。子供らしくつて可愛（かはい）かつたから、

体操を知つてゐるかいと訊（き）いて見た。すると、体操は忘れたが、縄飛びなら覚えてゐると云ふ答へがあつた。ぢややつてお見せと云ひたかつたが、三味線（しやみせん）の音（ね）がし出したから見合せた。尤（もつと）もさう云つても、恐らくやりはしなかつたらう。

　この三味線（しやみせん）に合せて、小林君が大津絵（おほつゑ）のかへ唄を歌つた。何（なん）でも文句（もんく）は半切（はんせつ）に書いたのが内にしまつてあつて、それを見ながらでないと、理想的には歌へないのださうである。時々あぶなくなると、そこにゐた二三人の芸者が加勢をした。更にその芸者があぶなくなると、おまつさんなる老妓（らうぎ）が加勢をした。その色々の

声が、大津絵を補綴して行く工合は、丁度張り交ぜの屏風でも見る時と、同じやうな心もちだつた。自分は可笑しくなつたから、途中であははと笑ひ出した。すると小林君もそれに釣りこまれて、とうとう自分で大津絵を笑殺してしまつた。後はおまつさんが独りでしまひまで歌つた。

それから小林君が、舞妓に踊を所望した。おまつさんは、座敷が狭いから、唐紙を明けて、次の間で踊ると好いと云ふ。そこで椿餅を食べてゐた舞妓が、素直に次の間へ行つて、京の四季を踊つた。遺憾ながらかう云ふ踊になると、自分にはうまいのだかまづい

のだかわからない。が、花簪（はなかんざし）が傾いたり、だらりの帯が動いたり、舞扇（まひあふぎ）が光つたりして、甚（はなはだ）綺麗（きれい）だつたから、鴨（かも）ロオスを突（つつ）きながら、面白がて眺めてゐた。

しかし実を云ふと、面白がつて見てゐたのは、単に綺麗だつたからばかりではない。舞妓（まひこ）は風を引いてゐたと見えて、下を向くやうな所へ来ると、必ず恰好（かつかう）の好（い）い鼻の奥で、春泥（しゆんでい）を踏むやうな音がかすかにした。それがひねつこびた教坊（けうばう）の子供らしくなくつて、如何（いか）にも自然な好（い）い心もちがした。自分は酔（よ）つてゐて、妙に嬉しかつたから、踊がすむと、その舞妓に羊羹（やうかん）だの椿餅だのをとつてやつた。もし舞妓にきまりの悪い思

ひをさせる惧がなかつたなら、お前は丁度五度鼻洟を啜つたぜと、云つてやりたかつた位である。

間もなく躁狂の芸者が帰つたので、座敷は急に静になつた。窓硝子の外を覗いて見ると、広告の電燈の光が、川の水に映つてゐる。空は曇つてゐるので、東山もどこにあるのだか、判然しない。自分は反動的に気がふさぎ出したから、小林君に又大津絵でも唄ひませんかと、云つた。小林君は脇息によりかかりながら、子供のやうに笑つて、いやいやをした。やはり大分酔がまはつてゐたのだらう。舞妓は椿餅にも飽きたと見えて、独りで折鶴を拵へてゐる。おまつさん

と外(ほか)の芸者とは、小さな声で、誰かの噂か何かしてゐる。――自分は東京を出て以来、この派手(はで)なお茶屋の中で、始めて旅愁(りよしう)らしい、寂しい感情を味(あぢは)つた。

(大正七年六月)

底本：「筑摩全集類聚　芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
　　　１９７１（昭和46）年６月５日初版第１刷発行
　　　１９７９（昭和54）年４月10日初版第11刷発行
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：土屋隆
校正：松永正敏
２００７年６月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。